

9月11日(木)、12日(金)に、能登半島の珠洲(すず)市を中心に輪島市も訪問してきました。

能登半島地震は、2024年1月1日16時10分震度7が発災し、震度6強の珠洲市では、主要道路が土砂崩れで寸断され495人が孤立(右図:×が寸断箇所)した。丁度1年前の9月21日から23日の奥能登豪雨でも多くの被害があり、今回はその2つの災害現場の訪問ができました。



11日午後、珠洲市役所を訪問し、ハイツまつりの際の能登半島震災・豪雨災害支援の義援金を届けさせていただきました。

その後、泉谷満寿裕市長にお会いし、臼井昭島市長からの親書をお渡しした後、発災時の珠洲市内の被災状況の説明がありました。珠洲市は能登半島地震で震源に近い場所として甚大な被害を受け、津波で市役所近くでも飯田港周辺の商店等に大きな被害があり、地震により地理的に孤立し、主要道路の寸断などで支援物資の輸送が遅れ、復旧作業も難航しました。震災後、人口減少も加速し、珠洲市の復興は地理的要因と交通アクセス問題が大きく影響しています。地震の被害は、死者が151人、住宅被害は5,583棟で全壊が1,749でした。豪雨被害では死者が3人、全半壊75棟で、高齢化率は51.6%で周辺地域としては一番の高齢社会とのことでした。



防災都市計画研究所の吉川忠寛所長の紹介で珠洲市三崎町寺家下出地区の出村正幸さんと市役所で合流し2日間、被災地現場を案内していただきました。

まず、珠洲市内の被災箇所を回りながら、飯田港に行きました。発災から1年半の復興状況を説明いただき、驚いたことはほとんどの電柱が傾いたままでした。

港は地震と津波で破壊されたままで、「さいはてのキャバレー(右下写真)」は本年7月に解体されていました。出村正幸さんは、この建物を残す活動をされていました。

40年以上前には、この港から佐渡までフェリーが運航されていて、フェリーターミナル棟は廃止後も残存しレストラン等に用いられ、2017年からは奥能登国際芸術祭



の一環で飲食を介したコミュニケーションを図った常設作品「さいはてのキャバレー」として案内所やイベント会場などに用いられていましたが、昨年の地震にて津波が直撃し内部の大半が損壊されましたが、2000年に外壁に描いたイルカの壁画の大半が残存し「奇跡のイルカ」とも呼ばれていましたが昨年に奥能登国際芸術祭実行委員会が解体を決定し本年7月に解体されました(残念です)。これまで訪問した「南三陸の旧防災対策庁舎」や「石巻の大川小学校校舎」は、震災遺構として残されています。

その後、県道28号(奥能登絶景海道)で、須須(すず)神社に向かいました。須須神社は日本海側一帯の守護神とされ、第10代崇神天皇の時代に創建された由緒ある神社で、津波のため海側の鳥居は破損していました。

丁度翌日から始まる須須神社の秋祭りのキリコを特別に見学させていただきました。日本最大のキリコで、高さ16.5m、重さ4t、屋根の大きさが約12畳もあります。大きさに加え、総漆塗りで金箔と彫物で装飾された豪華で美しいキリコでした。日本遺産の「寺家キリコ祭り」の模様は21日朝テレビで放映されていました。



次に今回の目的地の命を守った合言葉「何かあったら集会所」の寺家(じげ)の下出集会所にいき、下出地区の避難状況やこれまでの減災への経緯等、詳細に説明を受けました。

- ・半島先端の東岸に位置し、35世帯約80人が暮らす。
- ・2011年の東日本大震災を機に、毎年津波避難訓練を繰り返している。
- ・「揺れたらすぐ避難」を習慣づけている。
- ・集会所は海拔22メートルにある。
- ・避難経路は4つのルート(右図)ある。市には集会所まで上るための「階段」をも求め整備された。
- ・神社跡地に有効活用して集会所を建設。
- ・海沿いに民家が集積するものの、東日本大震災が起きる前までは、津波に対する危機感は高くなかったが、東日本大震災で津波が街ごとのみ込んでいく映像を目の当たりにし、住民の意識が変わった。
- ・発災時、津波が堤防を乗り越え、沿岸の家々を襲い潮が引いたと思ったら海面が盛り上がり、繰り返し押し寄せてきた。高さ5メートルくらいだった。
- ・住民無事避難できたとはいえ、津波で海岸脇の家屋が損壊されたのか、随所で片付けが終わった空き地がありましたが、高齢化している地域住民ですが生まれ育った地区で復興にむけている状況をお聞きしました・





その後、集会所から海岸まで降り、津波被害の状況を詳細に説明していただいた。

下出地区を津波が襲ったのは、地震発生から間もない元日の午後4時10分過ぎ。出村さんのお宅も玄関まで津波がやってきて、車も流されてしまった。(右写真)



海沿いの民家は1階部分が浸水するなど軒並み被害を受け、家財道具などが流され、倒壊した家屋の木材や家財が道路をふさぎ、車の通行が困難な状態だった。



住民たちは激しい揺れが収まってすぐ、集会所に避難を始める訓練の様様。〔右写真：珠洲市広報より〕

出村さんは津波が襲ってきた時、近所の足の不自由な人を背負って階段(右写真)を上って避難所までの避難をしました。その際の様様を、100段ある階段をのぼりながら詳細に説明いただきました。



この階段が、地震の際に集会所まで避難路としての近道となり多くの方の命を守ったのです。

自然災害への備えは、日頃のあいさつ中心にコミュニティづくりと共に、地域の避難所運営とそこまでの避難路の確保も行政と連携して構築しておくことの必要性を再確認しました。

宿の緑光(ろっこう)旅館は、緑剛崎の狼煙(のろし)にあり、朝日も夕日も海からのぼり海にしずむ日本でただ一カ所にある能登半島”最先端の宿”でした。



夜は星が良く見え、5:30からの日の出は圧巻でした。東日本大震災の被災地を訪問した際の南三陸ホテル観洋からの日の出を思い出しました。

2日目は、宿から県道28号線、国道249号線を通り輪島市までの海岸線を回りました。途中で災害復旧関係車両のみ通行可能な箇所もありましたが、下村さんの車両での案内でしたので、通行できました。



能登半島地震の爪痕が随所に残る中、奥能登豪雨による冠水や土砂崩れなどにより、多くの道路が被災し、海岸線の通行は出村さんも10年にかかるだろうと思っていたが1年で、何とか開通していました。

片側交互通行の箇所も多く、トンネル入口が土砂崩れで塞がり海岸の岸壁に仮道路あるなど、通行車両はまだまだ工事関係のトラックがほとんどでした。





日本海の荒波がつくり出した奇岩「窓岩」が崩落した曾々木海岸では、地震により海底が隆起し、複数箇所では土砂崩れを起こしているため、国道249号では道路を、海底が隆起した部分を利用して、海側に迂回する形で、仮道路がありました。大林組のサイトには、発災後からの災害復旧に先端技術で取り組んだ詳細が綴られていました。(写真は、大林組サイトから)



1年前の奥能登豪雨珠洲市の山あいや海岸沿いの大谷地区を訪問しました。

1年前の豪雨によって地震で緩んでいた岩盤や山肌が一気に崩れ、一山分ともいえるほどの大量の土石流が何軒もの家々を呑み込み、現場では今も家の2階部分の軒先まで土砂や倒木が堆積していました。



ようやく土砂に埋まった道路が啓開され、車が走れるようになったレベルで、奥へは山側に新しい道路を作っていてこれから復旧を行うようです。



住宅の中はまだ、天井近くまで土砂が流れ込んでおり、言葉になりませんでした。自然の猛威の恐ろしさを知りました。花が供えられた個所もありました。先日のNHKでも同じ個所から、放送されていました。

丁度、災害後から携わっている方からこれまでの復旧についてお聞きすることが出来ました。土砂は一面に高さ3メートルあり、家々の屋根伝いで奥に進んでいったそうです。防災関連で訪問していることをお伝えしたら「ヘルメットをかぶるように！」との注意を受けました。今後の被災地訪問の際は持参しましょう。



大谷地区を後にして、輪島市に向かいました。今回の震災で日本海に面した海岸で、海岸線が幅数百メートルにわたって最大で約100メートルも沖へ後退し、海面だった所にはゴツゴツとした白い岩がむき出しになっていました。

輪島市内は、昨年7月末に訪問した際は、倒壊したビル等もそのままの状態でしたがほとんどが平地になっていて、これから復旧復興が始まるレベルでした。

今回の能登半島訪問は、震災と豪雨の被災を受け①命を守る、②なりわいの再生、③生活を再建、④歴史・文化の継承、⑤地域の課題可決等、これまで訪問した被災地の教訓も踏まえて、将来のリスクを予測した我が地域の事前復興の更なる取り組みの必要性を学ぶことができました。

文責：宮田